第4問 次の文章は、唐代の詩人杜甫が、叔母の死を悼んだ文章である。杜甫は幼少期に、この叔母に育ててもらっていた。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 50）

嗚呼哀哉。有兄子曰甫、制服於斯、紀徳於斯、刻石於斯。

A

或曰「豈孝童之猶子与、奚孝義之勤若此。」甫泣而対(ア)曰、「非

B

敢当是也、亦為報也。甫昔臥病於我諸姑、姑之子又病。問

C

女巫、巫曰、『処楹之東南隅者吉』。姑遂易子之地以安我。我

D

用是存、而姑之子卒。後(イ)乃知之於走使。甫嘗有説於人、客

将出涕、感者久之、相与定謚曰義。」

君子以為魯義姑者、遇暴客於郊、抱其所携、棄其所抱、

以割私愛。県君有焉。

E

是以挙茲一隅、昭彼百行。銘而不韻、蓋情至無文。其詞

F

曰「嗚呼、有唐(注14)ノ義姑、京(注15)兆杜氏之墓。」

（『杜詩詳註』による）

（注）

1 甫――杜甫自身のこと。

2 制二服於斯一――喪に服する。

3 刻二石於斯一――墓誌（死者の経歴などを記した文章）を石に刻む。

4 豈孝童之猶子与――あの孝童さんの甥ですよね、の意。杜甫の叔父杜幷は親孝行として有名で、「孝童」と呼ばれていた。「猶子」は甥。

5 諸姑――叔母。後に出てくる「姑」も同じ。

6 女巫――女性の祈禱師。後に出てくる「巫」も同じ。

7 走使――使用人。

8 謚――生前の事績を評価して与える呼び名。

9 魯義姑――漢の劉向の『列女伝』に登場する魯の国の女性。自分の子を抱き、兄の子の手を引いていた際に、「暴客」（注10）と遭遇した。

10 暴客――暴徒。ここでは魯の国に攻めてきた斉の国の軍隊を指す。

11 県君――婦人の称号。ここでは叔母を指す。

12 百行――あらゆる行い。

13 銘而不レ韻――銘文を作るが韻は踏まない。「銘」は銘文を指し、死者への哀悼を述べたもの。通常は修辞として韻を踏む。

14 有唐――唐王朝を指す。

15 京兆――唐の都である長安（いまの陝西省西安市）を指す。

問1　二重傍線部(ア)「対」・(イ)「乃」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 29 ・ 30 。

29 (ア) 対

① こらえて
② そむいて
③ こたえて
④ そろって
⑤ さけんで

30 (イ) 乃

① すぐに
② いつも
③ ことごとく
④ やっと
⑤ くわしく

問2　傍線部A「奚孝義之勤若レ此」から読み取れる杜甫の状況を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31 。

① 杜甫は若いにもかかわらず、叔母に孝行を尽くしている。
② 杜甫は実の母でもない叔母に対し、孝行を尽くしている。
③ 若い杜甫は仕事が忙しく、叔母に対して孝行を尽くせていない。
④ 杜甫は実の母でもない叔母には、それほど孝行を尽くしていない。
⑤ 杜甫は正義感が強いので、困窮した叔母に孝行を尽くしている。

問3　傍線部B「非敢当是也」は、「とんでもないことです」という恐れ多い気持ちを示す表現である。なぜ杜甫がこのように語るのか、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 32 。

① 杜甫は孝行を尽くしたという自負は持っていたが、より謙虚でありたいと願ったから。
② 杜甫は他者に優しくありたいと望んではいたが、まだその段階にまで達していないと意識しているから。
③ 杜甫は生前の叔母の世話をしていたが、今は喪に服することでしか彼女に恩返しできないから。
④ 杜甫は叔父だけでなく叔母も亡くしてしまい、孝行する機会を永遠に失ってしまったから。
⑤ 杜甫は自分を養育してくれた叔母に感謝し、その善意に応えているだけだと思っているから。

問4　傍線部C「処 楹 之 東 南 隅 者 吉」の書き下し文とその解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

① [書き下し文]楹の東南隅を処する者は吉なり
[解釈]東南側の柱を処分すると、運気が良くなります

② [書き下し文]楹に処りて東南隅に之く者は吉なり
[解釈]柱から東南側へ向かってゆくと、運気が良くなります

③ [書き下し文]楹の東南隅に処る者は吉なり
[解釈]柱の東南側にいると、運気が良くなります

④ [書き下し文]楹を之の東南隅に処する者は吉なり
[解釈]柱を家の東南側に立てると、運気が良くなります

⑤ [書き下し文]楹を処し東南隅に之く者は吉なり
[解釈]柱に手を加えて東南側へ移すと、運気が良くなります

問5　傍線部D「我 用」是 存、而 姑 之 子 卒」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

① 杜甫は女巫のお祓(はら)いを受けたことで元気を取り戻したが、叔母の子は命を落とした。
② 杜甫は叔母がすぐに寝場所を替えてくれたので命拾いしたが、叔母の子は重病となった。
③ 杜甫は叔母のおかげで気持ちが落ち着いたので助かり、叔母の子の病気も治った。
④ 杜甫は叔母が優しく看病してくれたので病気が治り、叔母の子も回復した。
⑤ 杜甫は叔母が寝場所を移してくれたので生きているが、叔母の子は犠牲になった。

問6　傍線部E「県　君　有レ焉」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 叔母は魯の義姑のように、一族の跡継ぎを重んじる考え方に反発していたので、義と呼べるということ。

② 叔母は魯の義姑のように、私情を断ち切って甥の杜甫を救ったので、義と呼べるということ。

③ 叔母は魯の義姑のように、いつも甥の杜甫を実子と同様に愛したので、義と呼べるということ。

④ 叔母は魯の義姑のように、愛する実子を失ったことを甥の杜甫に黙っていたので、義と呼べるということ。

⑤ 叔母は魯の義姑のように、暴徒をも恐れぬ気概を持っていたので、義と呼べるということ。

問7　傍線部F「銘 而 不レ韻、蓋 情 至 無レ文」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36 。

① 杜甫は慎み深かった叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それは実子以上に自分をかわいがってくれた叔母への感謝を思いのままに述べては、人知れず善行を積んでいた叔母の心情に背くと考えたためである。

② 杜甫は毅然（きぜん）としていた叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それは取り乱しがちな自分の感情を覆い隠し、飾り気のない文に仕立て上げてこそ、叔母の人柄を表現するのにふさわしいと思ったためである。

③ 杜甫は徳の高かった叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それは自分を大切に養育してくれた叔母の死を偲（しの）び、うわべを飾るのではなく、真心のこもったことばを捧げようとしたためである。

④ 杜甫は恩人であった叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それは恩返しできなかった後悔の念ゆえ、「嗚呼」と詠嘆するぐらいしかことばが見つからず、巧みな韻文に整えられなかったためである。

⑤ 杜甫はたくさんの善行をのこした叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それはあらゆる美点を書きつらねては長文になるので、韻は割愛してできるだけ短くしたためである。